

本学のウクライナの学生への遠隔授業配信の取組み（教育支援プロジェクト）が週刊朝日で取り上げられました

本学がウクライナの学生に対して行った遠隔授業配信の取組み（教育支援プロジェクト）が、週刊朝日にて取り上げられました。

この取組みは、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻により、学びの機会が奪われた大学生・大学院生に対して遠隔授業を提供してほしいと、ウクライナのトップ大学の一つである国立航空宇宙大学（National Aerospace University-Kharkiv Aviation Institute）のマルコビッチ副学長からの要請を受け、本学がウクライナの学生に対して遠隔授業を提供したものです。

記事は以下よりご覧いただけます。

○週刊朝日「有事下でも学びへの意志を感じた」オンライン授業でウクライナを支援した山梨大学

<https://dot.asahi.com/wa/2022092900089.html>

「有事下でも学びへの意志を感じた」オンライン授業でウクライナを支援した山梨大学

2022/10/04 08:00

筆者：松岡瑛理

週刊朝日



フォミチョヴァ・クセニアさん（撮影・松岡瑛理）

「今回限りで終わらないで」「これからもウクライナのことを応援してほしい」――。

[【写真】砲撃を受けたウクライナの航空宇宙大学の様子はこちら](#)

これらは今年、山梨大学がウクライナの大学に向けて行ったオンラインコースの授業（教育支援プロジェクト）の修了式で、受講生から寄せられた感想の一部だ。

2022年2月に始まったロシアによる侵攻は、ウクライナ国内の教育に深刻な影響を及ぼしている。9月1日付のロイター通信の記事によれば、国内で2300カ所近くの教育施設が砲撃や爆撃を受けた。そのうち、完全に破壊された施設は286にのぼるといふ。

安全に学ぶことがままならないウクライナの学生に向け、国内でいち早く支援を行ったのが、甲府市に本部を置く山梨大学だ。オンライン授業の配信が学内で決まったのは3月半ば。その後、数週間で配信体制を整え、1カ月後の4月15日にはオリエンテーション回の授業を配信した。独自の支援が短期間で実現した背景には、同大で働く一人のウクライナ人女性の存在が関わっている。

名前は、フォミチョヴァ・クセニアさん（40）。ロシアと国境を接し、ウクライナ第2の都市であるハルキウで生まれ育った。ハルキウ州にある国立航空宇宙大学を卒業した後、同大での勤務を経て06年、日本人男性との結婚を機に来日。山梨大学の大学院で博士号を取得した。現在は同大学院にある教育マネジメント室に勤務している。

母国で戦争が起きることをクセニアさんが知ったのは、今年2月、プーチン大統領がテレビ演説で「特別軍事作戦」の実施を発表する直前のこと。友人から「プーチン大統領がウクライナを攻撃する。あなたの両親は大丈夫か？」とメールが届いたことがきっかけだった。数時間後にはロシア軍の戦車がハルキウ州に侵入し、本当に戦争が始まったことを実感したという。

現在は朝起きると、家族に安否確認の連絡を入れるところから一日が始まる。無事がわかれば「今日はどこに爆弾が当たったのか」と聞く。「国内の状況を気にし始めると、どこまでも不安になってしまう。精神的におかしくならないよう気を付けています」とクセニアさんは言う。



砲撃を受けたウクライナの航空宇宙大学（提供：山梨大学）

ハルキウ州への攻撃が連日続く中、現地の情勢を案じていたのはクセニアさんだけではない。山梨大で国際交流事業を担当する茅暁陽（マオ・シャオヤン）副学長は3月半ば、クセニアさんに「ウクライナのニュースで、毎日怒りと悔しさが心が震えている。大学としてウクライナの人々に何か役に立つことができないか」とメールした。国立航空宇宙大学では、侵攻開始当初からロシア軍の砲撃を受け、キャンパス内にある学生寮やスポーツセンターも破壊されている。クセニアさんが同大の副学長に必要な支援をたずねたところ、先方が要望したのが、授業の提供だった。

山梨大の島田眞路学長がプロジェクトを承認した後、教員たちは手分けして授業の配信準備に着手し、約1カ月間でAI、クリーンエネルギー、水環境など計13の科目を準備する。うち要望のあった7科目については、国立航空宇宙大学を含む5つの大学に4月半ばから順次配信を行い、その後さらに対面で授業を行う1科目を追加した。

「『今回のような有事案件では、提供までのスピードが大切』と学長が判断し、私達もそれに応える形で準備を急ぎました。山梨大は国立大学の中では比較的小規模ですが、だからこそ決まり事にとらわれず、時に規則を改定してでも物事を進められるのが良い所だと思っています」
(茅副学長)

講義が始まった当初の登録者数は、およそ560人。受講生の中には地上は安全が確保されないため、大学構内の地下からアクセスする者もいた。しかし、攻撃が激しくなると、アクセスすらもかなわない学生が増えていく。最終的にコースを修了できたのは、5大学を合わせて22人ほどだった。ディープラーニング（AI技術）の講義を担当した西崎博光教授はこう話す。

「当初、私の科目だけでも80人近い履修登録者がいて、有事下においても学びを継続したいという強い意志を感じました。戦況が悪化する中、最終的にはなんとか発表会まで進むことができ、学びを完遂できた学生もいたことは大変うれしく思います」



山梨大学の正門前（撮影・松岡瑛理）

オンライン授業の配信は7月で一旦終了したもの、ウクライナの学生から継続した支援を望む声は根強く、今後もできることを模索していく予定だという。

今回の同大学の取組みについて、クセニアさんはこう話す。

「プロジェクトに関われたことをうれしく、誇りに思います。多くのウクライナの教師と生徒は、今回の取組を通じて学業の機会だけでなく、将来への希望も与えられたと話していました。希望は人間にとって困難を乗り越えるための最も重要な感情の一つです。山梨大学の学長や、関係者の皆様に深く感謝しています」

9月には、ウクライナ軍が反撃に成功し、ハルキウ州内のほとんどの地域を奪還したと報道された。戦況は一時に比べ落ち着いているとの見方もあるが、クセニアさんはこう訴える。

「ハルキウとロシアは約30キロしか離れておらず、ロシア軍が攻撃しようと思えばいつでもできる距離です。昨日（9月11日）も火力発電所にミサイル攻撃があり、実家では電気や水が止まりました。大学も通常の講義が行えず、オンラインで授業を行っている。戦争が終わるまではこうした状況がずっと続くでしょう。こうした状況を、どうか日本の方々にも知っていただけたらと思っています」

(本誌・松岡瑛理)

出典：週刊朝日

「有事下でも学びへの意志を感じた」オンライン授業でウクライナを支援した山梨大学
<https://dot.asahi.com/wa/2022092900089.html>